

子ども健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)

論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Impact of dog and/or cat ownership on functional constipation at 3 years of age: The Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

ペットの飼育状況と3歳時点における機能性便秘との関連

ユニットセンター(UC)等名: 甲信ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名: 信州大学サブユニットセンター

発表雑誌名: BMC Pediatrics

2023年: DOI: 10.1186/s12887-023-04412-4

筆頭著者名: 元木 倫子

所属 UC 名: 甲信ユニットセンター

目的:

ペットの飼育による飼い主の健康影響について、いくつか報告があるが、小児の便秘との関連についての報告は無い。本研究では、生後のペット飼育(犬、猫)の状況と3歳時点での児の便秘の関連を調べた。

方法:

単胎生産の児を対象とした。3歳時の Rome III で評価された機能性便秘の有無を従属変数とし、ペットの飼育時期との関連をロジスティック回帰分析を用いて解析した。飼育時期は、①飼育歴なし、②出生から生後6ヶ月まで(乳児期)、③3歳時(現在)、④生後6ヶ月までと3歳時の両方(長期間)飼育、の4群に分類した。

結果:

単胎生産 73,936 人のうち 8,459 人(11.6%)が 3歳時点で機能性便秘を有していた。57,264 人(77.5%)で飼育歴が無く、乳児期 7,715 人(10.4%)、現在 1,295 人(1.8%)、長期間 7,762 人(10.5%)の飼育歴があった。共変量を調整した結果、乳児期の飼育歴がある場合、機能性便秘との有意な関連を認めた(調整オッズ比 1.09、95%信頼区間 1.01-1.19、飼育歴無し参照)。

考察(研究の限界を含める):

犬や猫などのペット飼育が人に与える健康影響については、心理的、身体的、社会的な様々な利点があることがわかっている。小児においても、アレルギー性疾患や胃腸炎の罹患を抑制するという報告もある。動物の家庭内飼育が人の腸内細菌へ影響することや、周産期のペット飼育による幼児期の腸内細菌叢の変化についても報告がある。また、便秘の児特有の腸内細菌プロファイルを有する方向もある。生後早期のペット飼育による腸内細菌叢の変化が後の便秘発症に寄与している可能性も考えられる。しかし、便秘の原因には複数の因子が関与しており、本研究では食事内容や水分摂取量、遺伝的背景などが考慮されていないことが限界点として挙げられる。

結論:

生後早期の犬や猫の家庭内飼育と3歳時点での機能性便秘の発症リスクの関連が示唆された。